紀伊國名所圖會

一之巻下

和歌山部

ル 4
325
2

呂
門
號 325
巻 2

紀伊國名所圖會巻之一之下

府城

寄合橋
名所燒陶器
馬ゞ瀬
青岸
住吉神社（松尾社 竈山社）
五ゞ辻
名養寺（雄天満宮）
吹上寺
式宮旧址
名藏院（大師堂 僧広全）
光明院
亀ゞ坂
雄滝水
天狗石
日恵道

總糸
類宮（樓門 講堂）
竹法稲荷社
燈篭堂
蛭児神社（熊野大社児 雄之芝碑落）
法善寺（観音堂）
西岸寺（王舟社況 西方寺）
長覚寺
粉の坂（地蔵堂 連理松）
西要寺
仙人硯

本綿
傳法
紋羽織
竹法橋
本場
城山
蛭子祠
湊川口
小野所（大智院 岸松院 保寿院）

（祇園社 伊勢両宮 稲荷社 舞 惹 住吉社 少彦名社 天満宮 伸楽舎 李直宗碑 製恩院 出雲社 諏訪社 子守勝手社 紀舟社）

吹上

吹上谷

吹上白菊

報恩寺

蓮心寺

瑞雲院
玉泉房

大圓坊
玉林房

恵光寺

護念寺

大恩寺

大泉寺

明王院

今宿神明社

秋葉権現
富士淺間

天満宮
祓殿

吹上濱

吹上浦

吹上神社

霊社
鹿林院跡市廟

三十番神祠
鐘楼堂

法雲院
狐塚

三光寺

観音堂
松林院

地蔵堂
伊勢両宮

延寿院

玄恕上人
鈴観音

山王社
紫宮殿

車代主社

金毘羅
袖摺松

吹上小野

網師岡

位牌堂
成就門
手水殿
黒書院

三十番神社

歴代仏廟
祖師堂
林泉
祖師堂

妙法寺

観音堂
多賀神社

正寿院
春日神

最勝院
八幡宮
仏霊舎
法楽堂

慈教院

一切経
稲荷祠

吹上峯

吹上濱汐干

多聞寺

妙見堂
祖師堂

鐘楼堂

釈迦堂
大立院

位牌堂
本成院
三十番神祠

本光寺

忘老寺

大多寺

護摩堂
摩利支天
元三大師堂

十王堂
大国玉神

持仏堂
弁財天

疱瘡守神

月讀宮
推日尊

梅ヶ原

大黒天

稲荷神

弦田彦神

幡頭意上人墓

万性寺

観音堂

天三寺

芭蕉翁碑石
春山翁碑石

三十番神祠

丈六石

弁財天社
天王殿

稲荷社
開山堂

漢門
法楽堂

齊堂
観音堂

高松寺

山人検校之碑石

井原神社

宁頂神社

真光寺山

東福寺山

位牌堂

堀留眺望

丈六寺

浄心寺

光明寺

寄合橋　内町より後へ架る

當津の眼目働きの関鍵にして金城の小辺にあり橋上の行人
まるもおのおのたちまちたくて誠に江南の一都會とつちまる

合雜

望君城　大潘尤貴顕ある季君山城南海鎮嚴在　東君廟壮
成魚塩元有利草木豈無栄仁政聞寰内士民諷詠情　紀藩　桃林

寒月やりんりん城と鯖の声

恩糸　こゝに中の産物ある中にも高府の恩糸は皇都あくまで地美者高大長ある品
木綿　国内一の産にして其性他邦に比類するものなしすべてのすくなくうるおいあること雪景
のごとくにして麻綿とつくるこゝろ木綿とつくるこゝろあるべしこゝろあるべしこゝろ
近年この地の人情よりこゝろあるべしこゝろ
紋羽織木綿　こゝろあるべしこゝろ毛と撚糸とこゝろ紋羽織とこゝろ高府
十億はこのかう羽織して出るこゝろ毛とこゝろ出

寄合橋

謝泉南产生所
贈棉布因憶南
紀祇伯玉

南方舊聞木綿
花奇卉殊勝桑
與麻三尖楓葉
末深霜一寸葵
心欲傾陽瑤水
蟠桃子正結金
堤弱柳花如雪
蜚殼剖時迸珠
淚鶩群鬬來飄
素毛人間一葉
碧梧飛泉女夜
織月前機初傳
海上珊瑚市應

換山中薜荔衣
美人所贈我何
酬南望側身歌
四愁君不都布
草衣公孫作馬
援到日不樂留
可憐老去心空
壯却為平生憶
少遊

新井白石

紋羽織屋

足袋うて
ゆうめ
地も
あし
ふくろへ
紀州
んぞの
くけ
はぐ
よれ

浩平後調

文流丈流ハ宝暦七酉の年より
和歌山紀伊国屋孫六織足袋屋
ひろめ始り孫六織足袋屋
武夜の数之浅人
なく織の名乃
ハ見ぬ新嵐ふう
四字と書し織
上ふ吹出ア
野織の名
織出ア
明和巳の
文流と
を設こと
こゝ
ハ南織
こと

名ぶ
の
異羽織ねのあ
紀の国屋
れしさ

新撰
蘭岡

名所焼陶器　山口荘雄の山乃ちかく製して作るちうの事あるとかの中に

類宮　字合格のたしづめ　構門　東西五間南北三間　中門柵門とうあり　講堂　八間に五間　門額

学習院のこ字神祭主信敬ろ筆

尚國上古以来類宮の設なくんばあるべからざるもの中
葉以後兵燹ちらくにして舊典のうんぬべきなし初
南龍公の尚国よりいでさるるつゆ武帳武熙のまろうど
をたしたるい類宮ふるこ國家の子弟をしてこれ
邪くを乎ろう德よすはちあんとおもしなのつたえ創
業の世ゆるぎこれなよかりたまうる皇あるべき事ぐ
右廟御在藩乃日ちうめく今の地よ仮ふ学舎をいと
ちうたまくいこもも尚つまぐ全うべ
當君御襲封のちぐめ
先君の遺志と継ぎちうひ竟よ乃七年有ゆに命じく

これ造立すべうる儒員日くに輪番ちうく出勤し藩
中子第ならび庶人のもぐにいろまて教育ちうこと日
年毎に授業の級最よまぐい出務のもぐにい特よ奨励あつく
これ褒賞ちうこうまこ例崇考秋の二時にて祭ちて堂
國君御在國にぐ臨くこまこれたまいれいも
為重ちうかこれ文学日くに啓しく俊傑の士國よくち
民ち悦の徳よ浴ちう今にしく志ち南方文明のれこちい
ちうこと支ちうんちうふ我邦学校と立ちうこと　天智天皇
の紹よちぐまり　持統の紀よ大学寮あり　孝徳の紀ち
桓武の紀よれんぐ生徒稍に衆多ちいたちうよ勧学田ち
れこちうこの要に供しなまいし田ちうよんちう　淳和院学
の両院い源氏の学館にしく左京紀よにもしちう学校ち
い橘氏ち学館にしく橘大后嘉智の創ちうところ初学院

を藤原氏の学館として嗣のそれところあり和気清
麿は弘文院をまうけ小野篁は足利の学校をいとなみたまふ
これ文学の設けにして聖教となるものゝそれなるべしなら
ある書の一も支那より渡らざるもあれども近来七経孟子の
ごとき彼くにゝも亡くしたるくあらざりしを享保乃
比但徠先生の足利学校にて其ふるき板行をもつて人々へも
持られく既に翻刻をしらしむ宗本に吾邦右文の徳のつたはれ
あらんや

傳法

紺屋町にしてあり 法燈寺の禅師大閤秀吉公にしたがひ大伽法随の将むすし(?)
こひうけられて士になりてもちたゞ根来の寺院を根来とよびし
さしむ禅師の陰に根来をいくたび
あるひは大阪川口にもつての大閤と争ひたり
禅師むらく法燈をとゞめて此すてゝ伝来の法
ほとりかくまづけ

傳法橋

けるとなし
川口にあるゆゑに其うち治れ架にて欄干擬宝珠十二本あり 西へ
ゆゑにおもむける法燈の眺望りんたるなし

馬ヶ瀬

相坂の下 椿の本所にあり 西
川ぎしの角にあり

傳法稲荷社

風波のうけてこゝろゝ瀬ゝのりこえ水の音たえず
伝法ぐらのうちにあり 毎歳二月初午の日 参詣群集
一もとりの我こえ中にはいるゝ山畫のよ
小豆飯大納言家の家をちらにいひしたる

或ヶ日古へ此狐を老狐なりといふ怪しき
目よまろ百歳はいかに北斗星のよ
古狐藁毯をなして
数れをとりゆるしたりしよ

こくおいりんれい

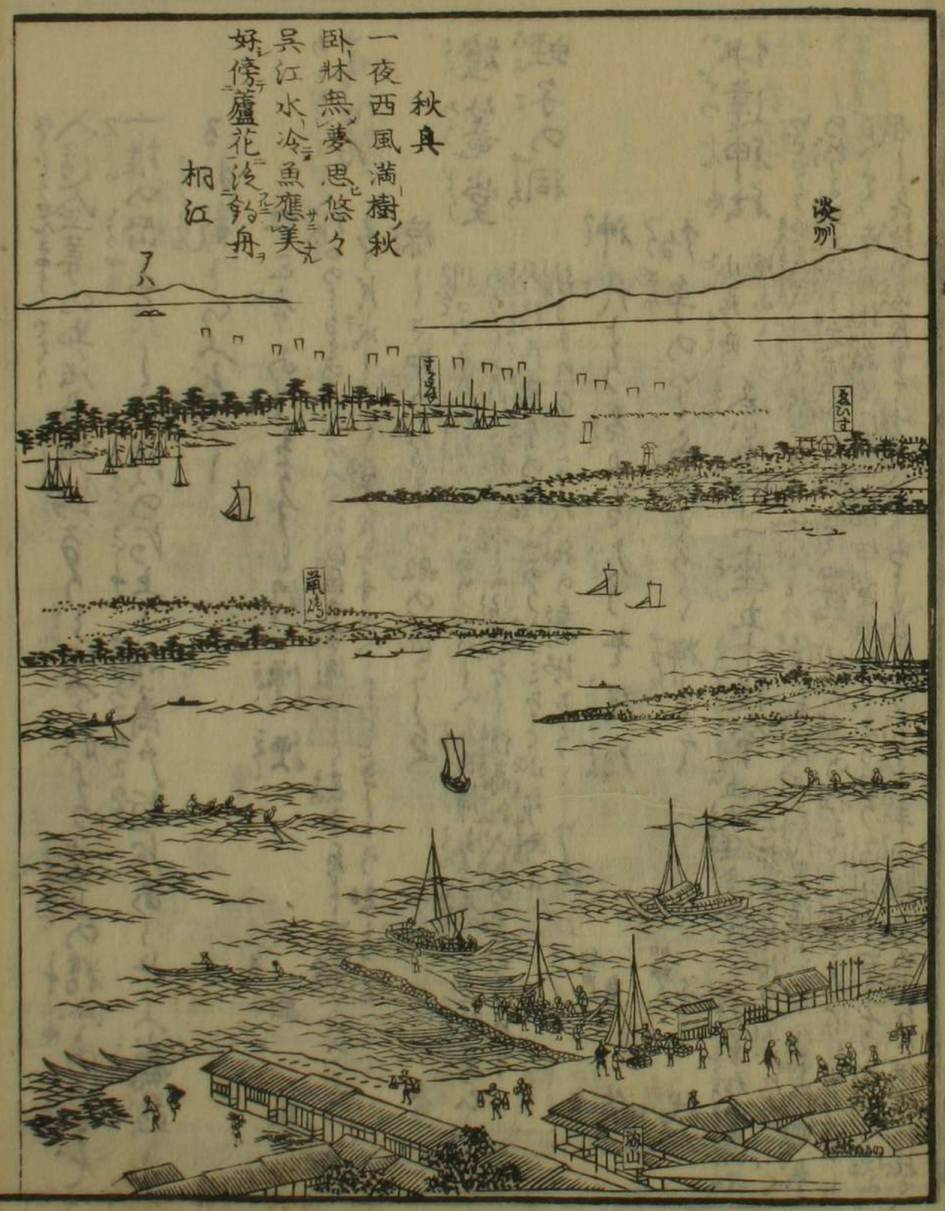
木場

伝法まへの寄洲をいふ
此所は吉野より山中より伐出しる材木を筏として紀の川
を流下りてここに集て湖とこれに両度を引くのまゝしと

城山

久保町のまる
東にあり
見るに市のある
むかしは天文年間中国の探題大内義隆家臣陶尾張守晴賢

淺河口
紀川


秋興
一夜西風滿樹秋
臥牀無夢思悠々
呉江水冷魚應美
好傍蘆花泛釣舟
相江
淡州

入道全善の出張の城跡なりといへり。これより吹上の精舎の辺まで一堆の岡ふたつらなりて湊の江に近く、寺萬戸、村ならびあり。せいへ山巍然とした る壮観といふべし

二三本あをきやうすき川霞標　　若山 画雛

音岸

川口のみなとの江をいへり。湊の東津にして出入の船ひとつもとゞまるを見れば、まことに氷しらく鷺のあすをとまりて、あをときし川の名あり

涼しさや方まつ船の帆ひらく　　正秀

燈籠堂

川口のさき松林の間にあり。かんしん和田浦の繁栄のころ一比丘のひとつてあかくいはひと遠く舟人の渡海をたすけ、商船入船の目あてにとくれたる外浦の船よりも望みこれを小野町にて

蛭子の祠

神代よりきたなりを揉綱　　江戸 貞佐

さざれ石のてらふれそめし御神まで　　加賀 千代

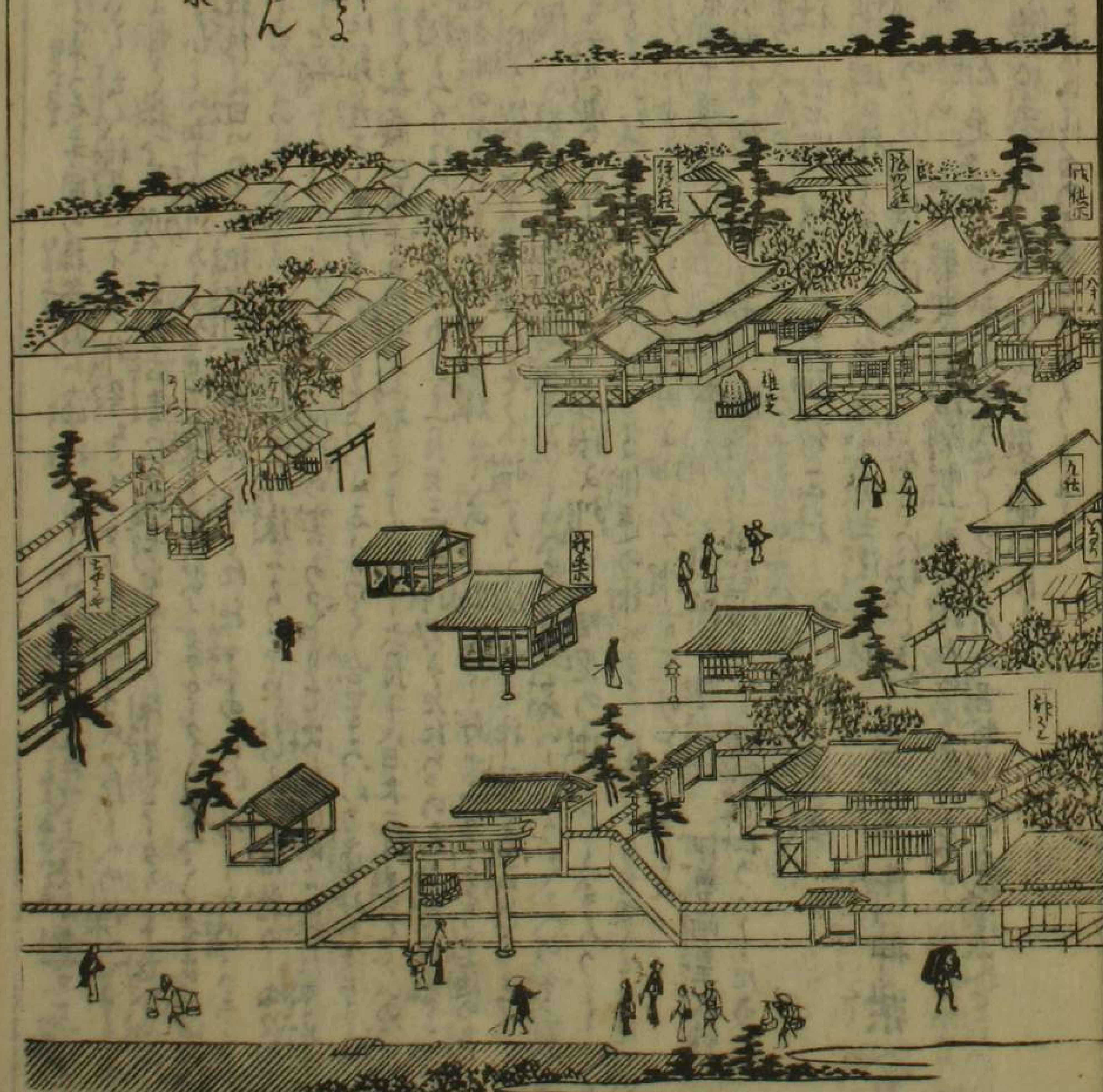
伊達神社

小野町にあり。祭る神一座五十猛命

五十猛命の世にしろしめす山東の荘にて延喜式神名帳に伊達神社、名神大社、続日本後紀三代実録等を按ずるに仁明天皇の朝に正五位下、文徳天皇の朝に従四位下、清和帝の朝に従三品をさづけたまへり。ここら本国神名帳に正一位伊達神社とあり。やしろ中古までは吹上の浜にありしを、永禄年間より旧の地に遷し、吹上の中にも伊達神社を

伊達社
蛭子社

御神楽や
出入も縁こそ
涼しきま
あやうん
　　去来



[illegible]

蛭児神社

[illegible]

末社

[illegible]

八幡宮社

[illegible]

領守社

[illegible]

稲荷三社

[illegible]

合祭

雄之碑銘

海部郡宇治郷昔建顕國社合祭蛭児神余生此郷嘗聞此地蓋五瀬命雄誥而薨之處因名男之立之[illegible]社辺所阡陌也名曰雄之町[illegible]紀國男之水門而詔曰[illegible]賤奴之手平孔為男逃而崩故號其水門謂男水門也陵即在紀國之竈山也按之日本紀大同小異也今以古事記為據遂告祠官邑長別立一區封土蕃艸以石冠焉余故勒行石以壽千無疆

寛文九己酉歳六月廿二日　梅溪李全直建之秘書

小野町

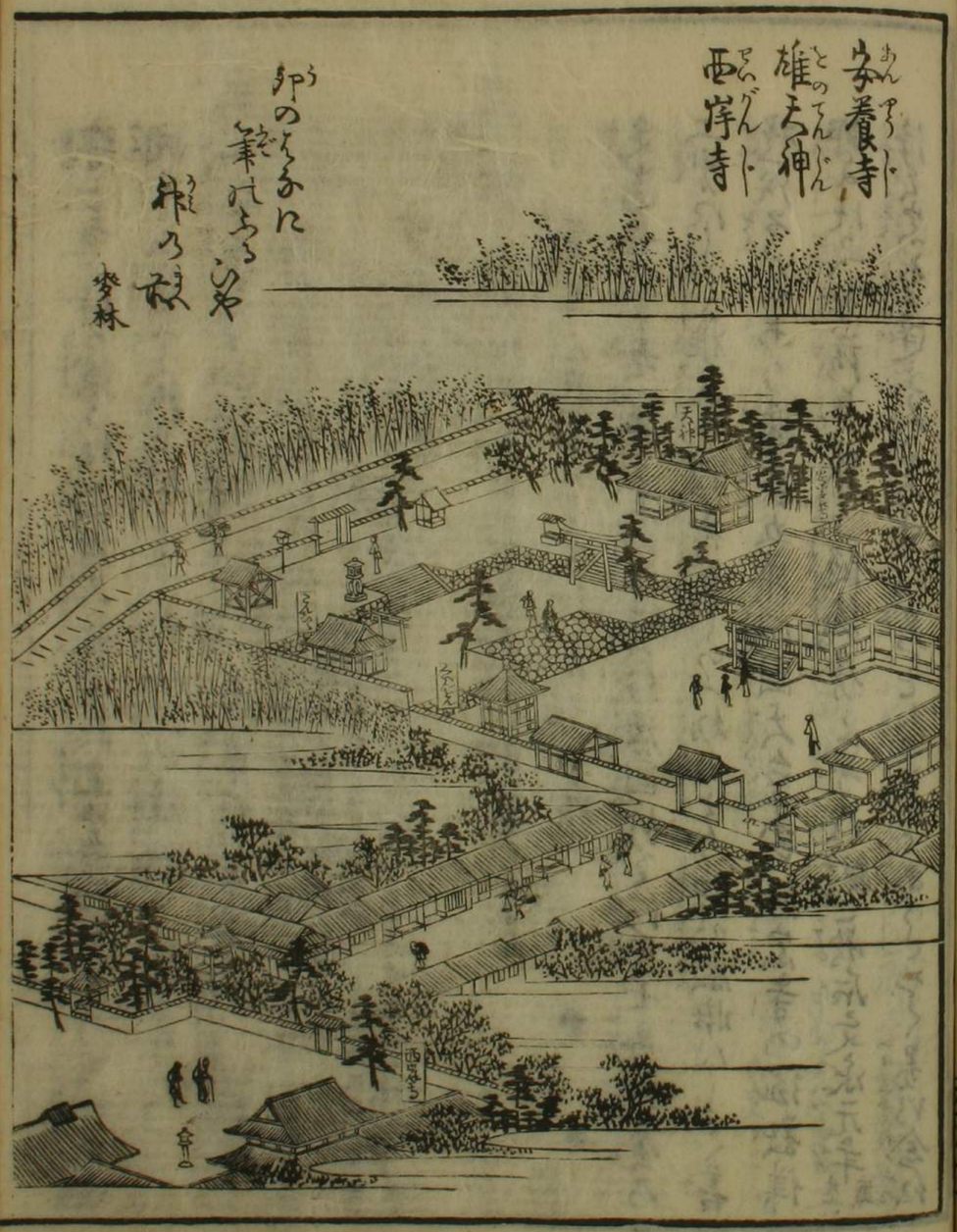
[illegible]

辻

[illegible]

玉隆山海善寺

[illegible]



たるかうの神と王ね社の神と社へたてまつる神功皇后三韓より帰凱まします時
に男の水門へ御とどまりたまふ所の崇まつりとて社をたてまつる帰
れば神社御手をかけて一日祈壇つかうまつりて帰さまくもうせ
ばひしかれば皇后食國の威徳をのそこたまひしく永く崇めまつれけるふとうり
て今別當寺と号奉しるの人こと法華経八巻を奉しるの人こと
はやとの時に三熊野の人こと逆のぶり高山のふりこちる見井の里のまつりよ
ばしくいうらせこるの人ゆらに祭りのの巻こるうのつくこころとさしく
祭人のまつれ寺年つ守護したまつるこころうめるいもるこれ歴たれべて
天正年間業山果報法社仏寺僧
あるこころうぐに為法つちろ

朝鮮國李子氏眞榮之碑石

碑文考五年 辛巳生 國朝寛永十年十二月十九日卒 正二品 朱紫 水陳元贈 正二品
碑文考 大春院 岸松 保寿院 西方寺

碑の人すう 梅渓の

塔頭

岸松 教恩院

當寺の開基詳ならず中興開山吾海上人に義濃國谷汲寺

の住侶なるしが然るに三山へ乳の打ろう高郎和田粉のしな
田ろうの事 砂の松江浦の 漁師右衛つ吉 ふるのく宅に止
宿しるの人のこれ王船神社の事跡をたずぬ右縁の地なるしば
して廢ろ仏再栄して一宇と建くするのち王船の神社と鎮

守とすしける然るに彼地大浪にて殺害せらるゝによつて吟念ゆ
間ここに堂宇を設けしく西山流の浄刹となりぬ

小野山安養寺 往小人町南にあり時宗 浄沼沢浄寺に属す 本尊阿弥陀佛 安阿弥作 長二尺八寸 観音も

本尊のこくなり 雄天履大自在天神社 本堂の西の丘にあり世俗小野天神と称す 八天暦年中橘直幹卿西国へ左遷の時乗船の

しとるへしも本尊に菅神を念じ奉りしに志願あやまたず勅免ありし浮浪の難に逢ひ霊夢によつて浄後の

告のごとく紀伊国男の水門和田浦へ流れよりまさんと霊夢によりて

と和田の浦浪によりて雄の地へ遷座ましましたまふとなり

所祥詠
梅あれば鶯が所縁をよつてくるまで吾立寄るく邪魔ならせん
鶯も三枝とちらへむ先の方 麥材

夫当寺の開基一遍上人の俗姓は伊豫国河野七郎通廣の二男にして稚名を松壽丸といふ幼少より聡明叡悟にして善提の志信あり建長五年同国天台宗の継宗寺の縁教律師をはたりへ剃落受戒し随縁房と号れ 十五歳 其の后文永元年 廿六歳 浄土宗聖達上人のもとまで名を智真とあらため易行念仏門に入建治元年冬十二月下旬より熊野山に参詣して證誠殿に一百日参籠し念仏安心の正信を祈願しかれば翌二年三月廿五日大権現の示現のことあり 此文ある熊野の乾其の湯の峯に碑あり 其てより一遍上人とあらたむ神勅によりて遍く南無阿弥陀仏 六十万人 決定往生のれさと諸国の庶民に賦算なし十八ケ年のあいだ国国に修行したまひ終に正應二年八月廿三日摂州兵庫津に於て遷化しあひたへり当国海部郡雑賀の荘小雑賀村のほとりに和田浦といふ所に草庵ありしに志ざしく錫をとどめ念仏弘通ありせられしによりて庵主唯阿弥随喜して徒弟となりしとなり其の後應永四年畠山右衛門督基国居舎を再営しく時宗念仏の道場となりし 其へとれ田園若干の寄附あり ありける浄仁の兵火に罹りく荒廃におよびしを本堂を寺号をさびに天満山安を明應年中和田浦より当湊小野村 今小野町と云 地へ引移せしと

芝長手中業山果報院此地ヨ移シ今の通坂ニ建ル

孤圓山浄秀院西岸寺　日蓮宗

二尺四寸余　弘法作　服士　浄土宗西流　本尊阿弥陀仏立像　長谷観音菩薩　左子堂　鎮守祠

八幡大菩薩　執行の作

高野山弘法手中ニ谷川右馬門左衛門の郎ニ[illegible]給ふ上人若年ニ和歌を[illegible]と[illegible]天仁二年十月十三日寂ス什物ニ若き大師自彫の画像[illegible]

浄土宗大原の[illegible]人皇百八世後陽成院の[illegible]

[illegible]と由緒[illegible]相模のわりむさ[illegible]記にあり

林鶯山憶西院長覚寺　日蓮宗　本尊阿弥陀仏　七寸八寸四方余

寺傳ニ曰夫当ちハ超覚法印ハ元の興者ニ[illegible]始ハ天台乃

道場なり法元の俗姓ハ北畠権中納言具教ニ[illegible]その先を

人皇六十二代村上天皇第七の王子二品中務卿具平親王十四代

従一位准后親房ちう親房嘗ニ暦應二年当国和田の

浦ちる小の山ニ艸庵ヲ結ブ自ら林鶯ト号し

世の塵埃とさけ[illegible]ひ寂寞をあるんじけるうち[illegible]や

父師童が十七回の遠忌なればとて菩提のために石塔婆をたてゝ
今に寺内にあり　また矢大明神を再興しまくこれを鎮守となして延
文四年四月十八日終に六十七歳にして往生ありし其のち六代具
教の代になりて伊勢国司職に任ぜられ織田信長と数度
合戦に及びしが永禄九年十月和睦のことその後信長が二男信
雄をもつて具教が聟として具教入道して
法諱を超覚と号す　後清光とも　あらさむ志られ超覚五男ありそのく
信雄とうしとく卑ところあつてかくなるに無礼をなせしにより牧なり宮
にありて信長大に激怒し天正四年十一月廿五日軍を起こし
不意に襲ふてのゝしり給ひあまたくらだ超覚力屈して是を
支ふることあたはず窃に当国熊野那智山にのがれしは五
年正月親房が隠操を志ていひ其のあとをうけしく遂に
和奇浦にまさ川く一宇を造立し親房が号によつて山緑

林洞といひ院を憶西といひ弥勒寺と名づけて天台止観を
修しけるが同八年四月十日大坂石山本願寺より御門主父子（顕如上人・教如上人）
石山の城を遁去あつて当国に下向ありしかば雑賀の門徒
に土橋平治郎なるもの己が居宅を別業に構へしつらへすなはち是を
もつてその後の御坊とさだめさせて門徒には土橋平治郎を
始として鈴木孫市岡本三郎太夫宮本仁右衛門佐久間休左衛門其余
雑賀党と名をなしものども家もかくもさむらひて御坊をも警護
し奉りたりしが信長さきに五郎左をつれ二千騎の追兵を我台へ
てこれを追討しむ雑賀党は門徒等かのごとく守り防ぐと
いへども多勢に敵しがたくあまりに既に危くみえしかば御門
主父子には真宗の滅亡今このときなりと思しめされしかも高
祖の御真影は敵の手には渡さじとて庭上に柴薪をつみの
ごとくにたまひし也焼亡に火をうけ御父子既に御真影を抱て

其中にとびつてんとちゝもゝ形よ孫市体たつを常に超覚法印
にちてゝく交てゝくびけゝに急とにげゝ助力をんに超覚え
より信長と深き恨あまびたたすくこれ許諾せゝわどに
二人とぢくとせうて其由市門主と義ゝちゝんとちろん
かてゝこんるようあてゝゝ兵ゝぐわちに顕如上人沖衣の紬
をちゝゝとちひやとくようく家つ命とれゝむにあねども
勿体ちくもまる但今年沖若貞あゝせたまい真さちゝさ
ひゝ他力本願のこゝを示世にあらゝく滅亡さんとうにゝ
も恨ちんゝたいま代門徒のゝちに遺ゝ変せたまい沖真
影にんをおちち沖記念ちろふ怨敵の手に失ちんとゝ孫さても
ちをあるりに山ゝゝ仏法のゝあるに止るべと
のゝるつる門徒おもふ涙をちゝつて言契にちくて唯称名
とぢちゝたるかゝくあゝさとちれゝ門徒ホ上人とちゝ元

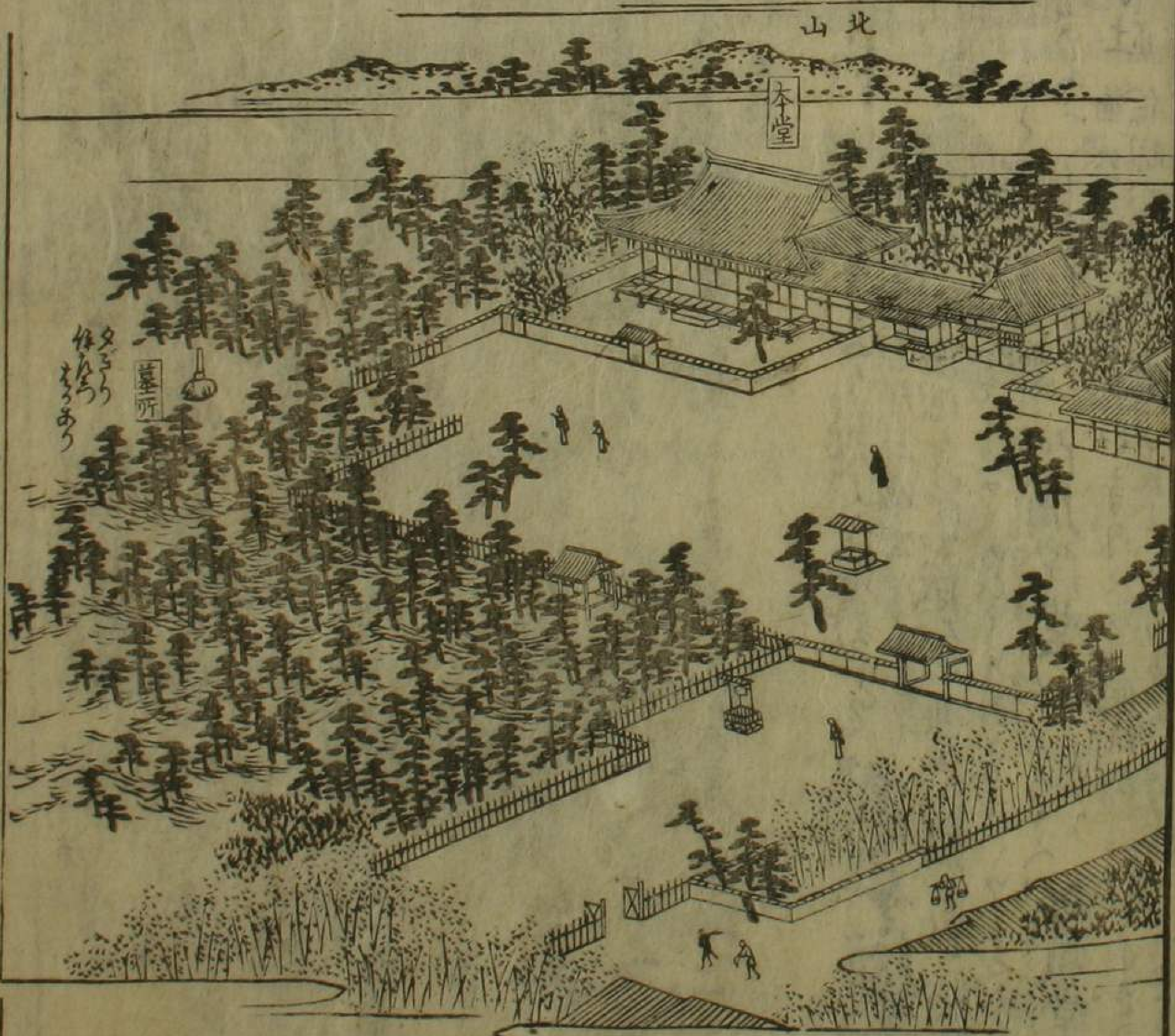
ゆゝゝセ弥勒寺山にうたゝ一ちる教如上人にさゝに沖思案
をゝゝゝにいふふしてゝ長秀に説ゝ和義をゝうそのんとひ
とうに忍び出ちセゝるひゝに寄子の男ども方血と論ゝびわを
討取んと追ホゝちにた上人のゝにゝとちもちゝ作よ雑賀
崎ちる鷺の巣ちゝる巌にゝたまひ三日三夜ゝ行沖会
来ども絶たまい人典おゝゝ不思議ちるん法上よ端要ち
ゝ人おゝにしゝかことに死りして長刀と火車のゝくにあゝう
ゝ敵をちセゝに戦ひゝゝ寄手ハ打もゝあ人のちゝたよ
強ゝ迫ゝちるもちるさで遠差にゝ生ちゝゝちにしてゝ六月
二日京都本能寺にゝ信長父子ゝ為ゝ生ち合ゝ
ゝゝに丹羽ゝ軍中伝よ接紀ゝ法要をすてゝゝあ家ちた
にゝ上京セゝゝびさゝも危急のゝるに方ちゝ必ゝに蜀して
沖門主ホ上ゝゝ門徒のゝんゝ安堵のゝりひとちゝに

けりさるにても父母の安んい夫の為の仁慥れしく其へとれうしか
山下に従して故んとあるなるしかどもちとさぬくの霊験あらさ
まざ其後西御門主に入翌九年八月まで寄進よろくてもひ
しづそれよりしてい當山に移りせたまひ又の年の六月まで入せ
なまへ此時超覚に教 如上人の御勧化を聴聞ありしより頓に
宗の停絶して御弟子となり法諱をあらためく浮泉となへ
こまより永く其寺の道場となりけり 上宮寺御坊の浮泉とたてまつれども寺僧田人
これ石をもてたる此門のんぐる寺人 近来再建ありしく美麗なり日毎に晨鐘の響く
より老若の緇素袖を連ねし仏恩の称名耳にかしましきをもば
去此不遠の浄土ともいつべし
什物赤栴檀阿弥陀如来尊像 長二尺三寸八分伝教大師の作なりれ 遊蕩の安置してまつるものにして
関白秀吉朝臣征伐のおりからこのうちに青山よりたまひし木像のこのあたりにうつさせ
にならく住居せしたりのかのありしところの器なりある
時代貞吉に係て 鎮守府大将軍源頼家卿所持長刀 志津三郎兼氏作 此頼家々の石塔和泉国安部野にあり

吹上寺

そのかみこのところハ住吉の府松や町といへ
るよほれるつよろこるものあり
経文中に林あり是が墓地なる
ありければとて夕暮わかれつつ
此の所の両後の碑あり是
吾がはるかに見てひろふ
れから南にある玄宗の
が抄を記ざるく旧日の
遺跡

夏日卸事
讀罷芬陀典深林人事
静目手門未関禅林坐
松影



天王山吹上寺　濱の所に有よあり禅宗
洛家京妙心寺に屬ス
本尊観世音　俗二行基の作
當山は古刹にして開基と聖徳太子尚ほ人紀年詳ならず
ちなめ吹上の峯車坂の辺る建立ふるえ和の比丹國
主淺野但馬守長晟の夫人正清院殿養誉果悦尼方大姉茶
毘の地也　神君の姫君に
弟ハ蒲生飛彈守忠ハ嫁し五人所之
ろの比此地にうつり
久しるべ此ところ隣の高岳にして此ちこ高ふ樹よ
松樹茂々林と成り　岩暑のころ涼風ふくまてと
ろ〳〵ふ人を〳〵頃〳〵義皇上よあ〳〵む旧名この地と千
年まで〳〵

松龍山光明院普門寺　左田の内にあり
本尊観世音
俗二行基の作
大師堂　本尊の内に
四国八十八ヶ所と
阿彌陀堂　本尊の内に
地藏堂　本尊の内に
稲荷神　寺内にあり
弁財天女　阿伽石　寺内にあり
須弥天　本尊の西にあり

鵜嶋

連理松　國祖君の御殿庭前の松にてうつくしとへうしもまつへけれ

上町綱屋町材木所横雲町此四町ハつゝきしく内ハ経て年ふる和田といふ者の宅　七丈様まうり四方枝さし西二十五間南小十五間たて

律なるくしとて大半彼所のれよりひしうちそれうしそ繁殖とちへ家のころ

よろつよを法ふ累世の家あり

卯のをなく待まのとき初かたな　槐亭

ほり鯰まうきまへきろ牡丹か卯　鬼貫

恵美須社舊地　牛町　亀か坂　門前よりあり恵美須社の旧地とていふ　天狗石　門前にあり

孤雲山來迎院西季寺　本町西よりあり　本尊阿弥陀仏

當山ハ古刹にして開基詳ならん慶長中九巻上人を中興開祖とし

南岳山宝蔵院寶林寺　本尊大日如来　不動明王　弘法大師作

長四尺余　大師堂

雄の清水　門前の西にあり清冷にしく寒暑に増減なし田畑の料とん

日恵芝　堂形の西にあり

仏人の硯

仏人の名をとるにやよりつ奇石あり形硯のことくにして其中に文字の

こく成ものゝあちこちとて土人仏人の硯といへる所謂石硯

ことく盛りるものゝありて土人仏人の硯といふ

先格鬼神鬼一洞なんどのまれのめもあれ地上にある石根深く

一尺ばかりせる人嘗て穿とんとせしを掘しもるに彼是

のよふくもあれ六書の外梵字蜜字にもあらす

べきのかたし今其を縮摸して左にのぶ

にぶ紙義なる人あらば今の世の櫻嗣君もしつべし

石質は和泉石といふものにて

縁にそくすとなくうるは

霜甚久をしれしく其外

らんいろへ触る所なし

工のまふし

吹上（ふきあげ） 同郡府城の西南をいふ まさご山高く

此吹上の濱より西南の風烈しきときは白沙高く吹上げ一夜のうちに平砂忽ち山となり又たちまち崩てもとの平地となる これ常に風より砂を吹上るによりて吹上の名をもつてなり 此地は昔より月の名どころにして文花古詠多し あるさほど年来蒼海三千里桑田となるのみならず今は其佛さへも廃して衛士の篝を連らぬ 出る月も家より出て家に入の風情はなかりけり

清少納言枕草紙 濱は 吹上の濱

後拾遺

都にて吹上の濱を人とはゞけふ見るばかりいかゞかたらん　懐圓法師

新古今

浦風に吹上の濱のはま千鳥波立くらし夜半に鳴なり　祐子内親王家紀伊

同

月ぞすむたれかはこゝに紀の國や吹上の千鳥ひとり鳴なり　摂政太政大臣

同

うちよする浪の音にてしるきかな吹上の濱の秋の初風　祝部成仲

新勅撰

吹しほの桜もともに春風の吹上の濱にちるかとぞ見る　家隆

同

波よする吹上の濱の浜風に吹しもやらぬ雪ぞ残れる　前参議教長

續後撰

都にはいつかかたらん紀の國や吹上の濱のあきの夜の月　藤原基綱

同

沖津風吹上の濱の白妙にちりすさのかる秋の夜の月　権中納言爲雄

同

よそにみし吹上の濱の浦風にちりしく真砂のくもりをぞ見る　定家

新後撰

冬さむき雲井のよそに沖津風吹上の濱は月ぞさやけき　法印寂信

新千載

立浪のよするおもかげ浦風の吹上にすめるあきのよるのつき　山本入道前太政大臣公守公

同

沖津風吹上の千鳥よやさしさ鳴近き波に鳴なり　白河院御製

同

吹上の真砂の濱のなきにけり渚のちどりおとものこさず　三条入道前太政大臣

同

沖津風吹上の濱のしほ干にさまよふ真砂に千鳥鳴なり　光明峯寺入道前摂政左大臣

同

朝夕に別れしもせず吹上の濱の風にうけても　後円融院御製

新續古

さのみやは秋をく霜を沖津風吹上の月の影のそくし　嘉陽門院越前

堀河百

沖津風吹上の濱の寒き夜は千鳥うらみの夜をなく千鳥　永縁

南五

とはよりの山のはつ雪の白雪　源資氏

文永　吹上の浜風もまだふかぬ雪ふまれるもゝ千ちゝ郎　大藏卿有家

同　きのふやさ吹上の浜よりあく雪の塩色うれたるめん　慈鎮和尚

同　うゝ遠く霞たなびく塩風の松すゝ家の吹上の浜　前大納言為氏卿

同　月新しみ空もすゝくゝ多れ南うゝる吹上のさゝ　後久条内大臣

同　春風の吉ゝそらゝきの回や吹上の浜れ秋やらゝゝん　鎌倉右大臣

同　紀のくゝやあるのうるやの多ハさし吹上の千ちゝ月よゝ　後鳥羽院宮内卿

及裏名　裏の浜のなゝしもまゝゝこの山や吹上の浜よ霞目み　俊成女

沖集　桃さくゝ浜もたくゝ沖津色吹上のうゝれ浜のゝさん　後鳥羽院御製

紫檀　見るゝ山雲く浜ら別まくゝ吹上のもゝ　頂徳院御製

散本　きのくゝの吹上の浜よてる月いらくまゝの牧とよゝ　俊頼朝臣

山家　波のくゝる吹上のゝゝの海員風ゝとわれつゝ月むろん　西行法師

月借　きのくゝや吹上の浜よゝ波のゝくゝれ波まくゝれ　後京極摂政

飛鳥井

波寒くゝ風のあゝぬ沖津色吹上のくゝ海の雪の春波　雅經

隣女　白ふのひゝうゝ浜吹上の浜のまゝ分の秋の夜の月さ　雅有

家集　白州の雪吹上の浜風ゝ春とつきまくゝ遠とくゝて　為家

家集　吹上の塩風ゝくゝ文ゝ浜よ新くゝ村千ゝ鳥　師兼

家集　吹上やゝゝ分よたくゝまゝよひもゝ浦風の色　權大納言為尹

千首　春寒く折ふ上の浜風よ折ふゝ霞まくゝん　宋雅

夕題　吹上のゝ分ゝ山のゝ月とくゝ　頓阿法師

家集　ゝ分ちゝ吹上の浜のゝ月風よ岩ゝ波の声ゝくゝ　宮内少輔藤原光經

西槐　春風の吹上の浜の夜ゝの月ゝ分ゝ空よ霞くゝ　榮雅

名寄　こゝゝ文花ゝあゝぬ浦風の吹上よたくゝ松のゝくゝ　兵衛内侍

建保　春霞花ゝあゝぬ春風の吹上の浜よ波やゝゝ学　定衡

同　沖津風夕波くゝ吹の夕の波やゝ春のゝくゝ　行能

同　ゝ分ちゝ吹上の浜のあゝ春都の春ゝ月ゝ　康光

建保 すまをとく立かへる波の霞にもまかふ吹上の浜 後柏原院御製

雪玉 春風に[illegible]あしはら[illegible]吹上の浜 實隆

同 はのうる[illegible]砂吹上の山谷は[illegible]紀路の[illegible] 正徹

草根 しほの間に又[illegible]浦なみの吹上にちる[illegible] 耕雲

六帖 きのくにの吹上の浜に[illegible]ちらん 兼名

盧主 然野紀行に云紀の国の吹上の浜[illegible]月[illegible]面白し[illegible]

霜[illegible]

天の戸を[illegible]吹上の浜に立[illegible] 盧主

四条大納言公任卿集に云吹上の[illegible]

[illegible] 公任卿

本願寺第三世覚如上人紀行[illegible]

玉津島も[illegible]吹上の[illegible]のなかめ 宗昭

宇津[illegible]吹上の[illegible]

[illegible]

[illegible]吹上の浜[illegible] 少将

春[illegible]吹上の浜[illegible] [illegible]の君

[illegible] 長う

[illegible] ちうすけ

中納言[illegible]京極[illegible]世の中[illegible]

四条大納言
公任卿の上の
侍ける
源氏公任卿の
小池の宮殿文長宅れの
序弥れ忠の内るなりれ風
の女人めく三十六歌仙
朗詠集と抑しなまて

[illegible]

きのくにの吹上の浜のこゑたえぬ　大将

中将

吹上の浜辺の松ぞ名あるなれ　[illegible]

知らぬ間に何ぞ[illegible]あけてかなしき　加賀小枝

吹上や月にかりくる浪うしら　若小居

吹上の小野

続後紀の國や吹上の[illegible]　後九条前内大臣

丈木

[illegible]ふるる吹上の小野とうたひそてうの秋の浦浪　中務のみこ

同

秋もの吹上の小野[illegible]　光俊朝臣

同

[illegible]の吹上の小野[illegible]原[illegible]　中納言國信公

吹上の峰

玉吟　伊府城ハ岩石[illegible]

秋の夜と吹上の峰の木葉の[illegible]　家隆

吹上追加

続古

ひらたかるひさかたの谷の[illegible]　中務卿親王

丈木

岩風の吹上[illegible]

吹上る裾野の風やとみちへ　貞室

吹上ていつ[illegible]ます　素堂

吹井の浦

[illegible]

家集

天津乙吹井の浦よりのぞくかの[illegible]　藤原清正

[illegible]

家集

沖津風[illegible]の浦の立[illegible]　右京のこ

同

[illegible]の浦[illegible]　廬主

家集

服のうしのとりのとしのちきりにあへるこゝろを

月みるうらとうしあるこゝろをふけの浦のあかつきや　盧主

支木

芦田鶴もとしへあるこゝろを世ふけの浦よりあさ　寂蓮

御集

芦辺とうしをしらしたはふけの浦よりあさ　須磨院御製

ゆふ岩ねをのこす

わかるゝ川吹みかろ月はよみちゝ　其角

行とうもとしへ吹井の澄ろ　岩翁

細とうしへ吹井のうゝやつをしへ　横北

細師の岡

支木

ちゝ波を吹上の浦ゝあるゝの岡よふかちもの　よみ人しらず

吹上八景

雜賀晴嵐　従二位為久卿

嵐ふかうの浦ゝあれ細のもとうしへたゝく波つゝ　妹嶋夕照

入日うゝ塩瀬のうちのいとゝ波ふゝあへ波もへて

吹上秋月

空も波もかすみ〳〵やゝすむ月の秋風きそふ吹上ろ　飽浦飯帆

すむゝたゝゆるあゝ紀帆のゝくゝあきの浦を　名所山晩鐘

名所山梅麓ろゝ波の夕波もこゝをるうあいろゝ　紀滝落雁

沖漕ゝ舟ゝ帆ゝあけくゝ紀の海のゝゝるゝうもゝゝ　形見浦夜雨

わるゝやゝゝの海士のゝゝ波ゝ浦ゝゝもゝゝゝ　藤白暮雪

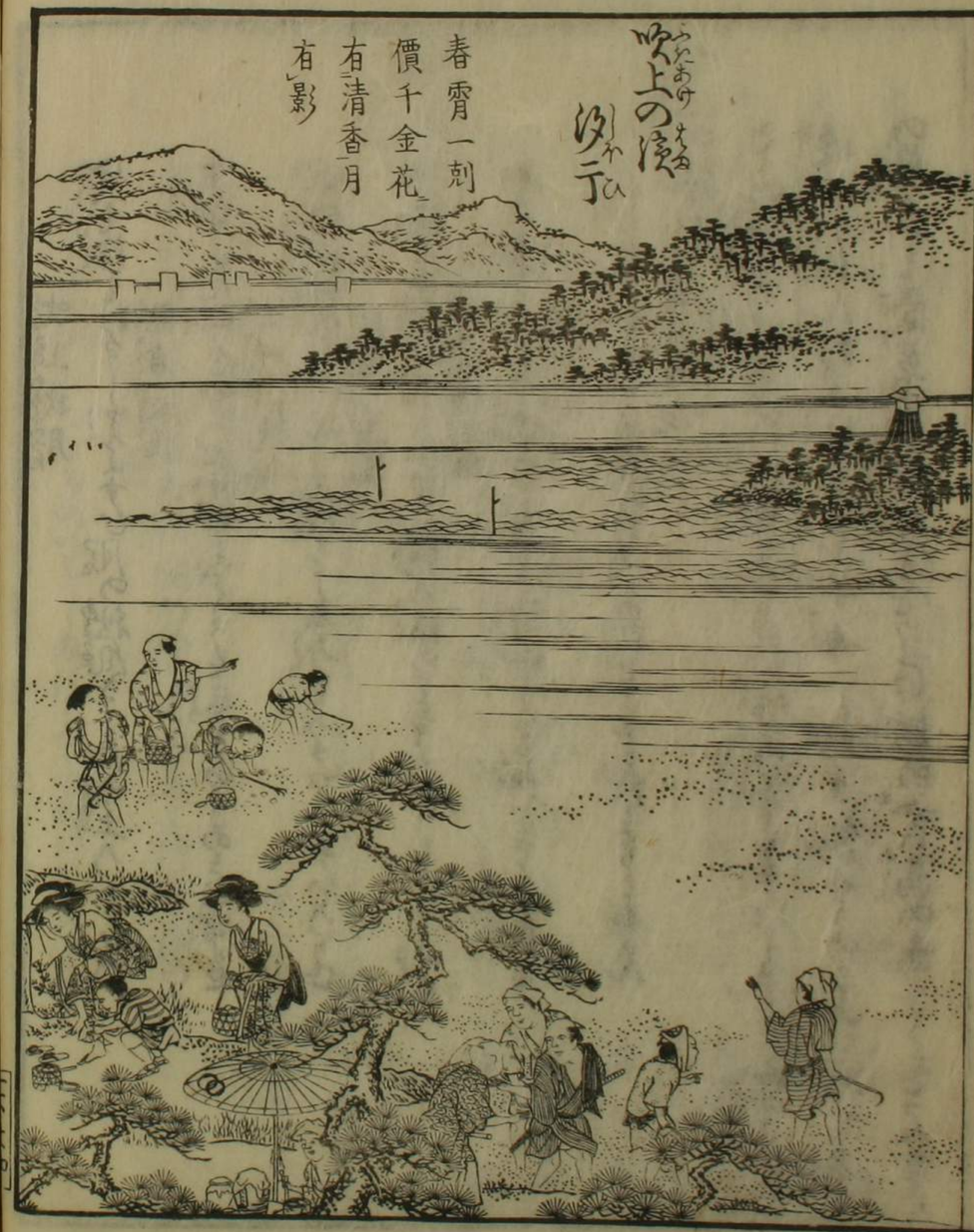
夕白や雪のゝゝるのゝゝ波ゝけて沖坂とゝゝたきゝゝん　世俗荒涼

吹上の汐干

ゝの上巳の汐干ゝゝ往吉ゝゝ波路ゝもゝ手にゝゝゝ　ゝうて

淡路へゝんゝゝゝあゝゝ手毎ゝ結ゝ結ゝのゝとゝて大名

の奥ゝも素足ゝゝくゝすゝゝゝゝ結の女ゝ西の赤ゝゝゝゝ


吹上の浜
春宵一刻
價千金花
有清香月
有影

肥後北里
一平
毛氈と
鬼貫
上り帆の
去來

汐干のひろう蛤流れ貝を負ひて拾ひてより大浦よりるまで人
ちらぬ所もなく茶屋店奥座敷店かげうつをあらせし絶まく春
色にふけりて出てうさをとる

汐干うかく蛤の油ひく名ちうの所　嵐雪

思分く海とうと白ふしかひ赤　伊勢　樗良

吹上の白菊　吹上のまねに

倉海桑しく桑田こる古人既よ名所は住區の世く沿革ちる
こ所嘆ぎるこく久しく柄の橋杉壺の碑うもしく跡のこるべた
ちなれも名ふ十歳よ杉ば埋まだして今た語りたこるものい絶よ
ちこ詩ふ賦ぎるこふく世ちうさふが常たしもあるものい賞ぎだ
しこく返て無こもの所愛こいるぞやちこしふ人みくいこぐ
當世の切分あうしいは其人骨と杉ちこつと竹帛たちるして
世くた其名所作つるぐしく今たして其跡のあふと

なれたこを論ぎんやこの吹上の白菊こしもつる其こころ其
花ぎこちちぐたこちくしも世くの勅撰ふもよこ入く其名いと
こちけまべ地の名こちうて殊よ挙ちるのこるるぐしもこれたれ
霜ぎべ菊ぎ其所ぎ昔久こちこい言たして私名左支ぎ新撰字鏡
こちうこふしぶも欲たもの切よ長久こよこ常たもたぐ長久く
呼ぎこふるこつて久しく八雲御抄よ陸奥国佐雅ぎ言ふてるい
本鞠たちる蘭い鞠ぎ本ぎ鞠ぎ人ぎたしく寄こて義ちう
いふくた日鞠こい寄ぎ花事こたるく寄ちると家
調ちる鞠いまと養ちうつてこちい私其志所ぎ中うちく其
手をのるちうこのこまう我邦ぎこの稚ぎることなし
仁徳帝の朔ちぐめく百濟国ちうこ所敵ぐ　里人の口碑よ

仁徳皇帝　うつく帝ぎ御宇の切吹上の
うつた皇御　くこちぎ幸ちしたまへ人わうつこの切吹上の
くたにおゆく白菊ぎ所ぎ新羅国ちう五色の菊所敵ちるくそた
うぐこちたまへこ　是日東た菊を愛こちるの所ちう字ぎ

帝の御時に菊の花の宴ありしよりこのかた代々に愛する
もの多く名花もまた随ひて多くなれり宝永より正徳
享保の頃ほひこれを培植すること漸に巧に今は数多なりし上
古へ唯小菊なるものゝみなりしか宝永にいたりて大菊は出たりし
我邦菊の一変せるものなりこれより後千態萬色あらざる
ものなし近世すべてのものを小菊あるひは中菊または紀州
菊ともいへり上古の遺種にして正菊なるものと称すへし
花鏡に九箇の菊は栽に曰く淵明が賞鑒せるところの
ものは越人呼て大笑菊といふ花大ならず心黄白瓣濶二寸
半 晩香の一寸七八分に過る にしかず其の清香なるは異なることを悉く是れ
うけ給はり物語次上巻
かくて九月九日こしよせらしやに此菊はみかたさ
まるにうつろひしまでのさて紫檀はしらんとほんれば

沈 ぢむやひねりやうむのくぼこしてやひくごうのさしたく 金 砂
ろかたをはちに白銀しておきてそれかうつろへる
はなのへしるあるさこむ紺青緑青なども花の房
にねやらうその日乃はしあてれどもそうせきほん
まゐらせたまへるのたんしの名かはとくしとたんありける
きくふつけうなる

あきつる
御房にほうりの菊をおりてみえけるにようことも見るもあさしあ
みず御坊してもよかりあるとおもしろう　式部卿のみこ
よそ
とこなかなのおもかげそのつゆのひかりとうろうかなしきに　中務のみこ
秋の菊その菊にもおとるものとおもふのしかもさるげさけん　兵部卿のみこ
菊そのまへそのよにひとつきはなものとようちなのあん　左大将
きく菊のなすそのある枝あれはそのはなへ花にもあるか那
きく菊のちとりはてかくもそのまのこすみのとうへのるか那

寛平の時付け申したる菊合にすこの人々とりてきくの歌

うへうたてよくくらけうこうとふきあけのきくの人々の歌

きくうつくしけんなるあけの

秋風の吹上にたてる白菊はたれかなるまよしたちあくとのよりろ　菅原朝臣

支木　花ぞしく菊のえたちうきろへふきあけの濱のちやうも　従三位為實卿

月　あれ風の吹上の人々の白菊はなのようるる花のさかりろ　素性法師

柏玉　白菊のそようちろきの葉やあたたきそれ吹上の人々　後柏原院

雪玉　たへく世の霜ともまと秋風の吹上さもさ秋の白きく　實隆

家集　さ屋ゐもの吹上よりるりなぐさもしや菊の葉の旬てん　宋雅

艸根　吹上の浜のさらはも白菊のさうろろ秋そまきくふ　正徹

自然斉発句

さ屋ゐやちふ吹上あるめしのきく　宗祇法師

浪紀菊を蜜ぐうたるの干布の葉　槐亭

吹上神社墟　府城の南吹上れ方浦へ注ぐ所の氏ちう屋敷の庭に古松あり

西行山家集云　待賢門院の中納言の局をとてふ成とて高野へ籠たあとのこと

山にて有ける院の跡のほとりは都の外の栖とていひさてへく
とくかねてしたりけるありかくなんくるさふ粉川へまかりける
ふもとより出おはしけるにまうで足よとありけまへくゆく
粉川へまかりなりかるほどにあるまじき事ありて
吹上といふ所へさしかかりければまうでゆく吹上へはこれなり
△道より大雨風おこりてまうでなく成ぬとききとてなく吹上は
ゆきさはさうたれども又所がらにかく社は奥ふかく
おもても似たりけるに能因がいひしろ水の中にとよみ
又ひはいふかぎりなれどもおもしろく社に書付ける
天くだる名を吹上の神ならば雲はれのきて光あらはせ
苗代に堰くだしけり天の川とまるも神の心なるべし
かく書付られければやがて西の風ふききたりてたちまち
雲はれてうらうらと日のかげも末の世なれども心さしのありける

それよりあしなすることなくやはくまんれこて吹上
わかのうらはいつれかひとくにしれなりけく
うはかむ後よと
其比の紀伊守ハ歌人より出たる人なれば此吹上の浜のあそびをきこしめしつけて
吹上の玉の浦のさまものさびしくましてたのもしく吹上の宮にまうでおはしまして
まうでさぶらふ後その日のおほむまうけそのまうけまうでまうでて四方國の
まてるあそむのおしきそちあそむのろく浜のきのつまとりしそのあちしき
おかんとものの人のまへにそてまうでたりけちとりおかんちしくらうてらとのおし
峠おとのつまりくるう歌へうまうそえしとへおりしさけたりうち吹上の
なむとそへたまへへしうもひさうす歌うふるの吹上の歌とうけまりかうこえむ
神の御のうたまおほくゆうしきにへおつくうちてゆしおつうととおかれよ
さあへへしおとにあんなくうたけるうとのやしこのゆゑまかりこころせん
えるひめんよねりこうしくこそあるなれ中署くく三月つごもりの日なりて
飛鳥うち吹上の社にたく春おしくこたりひさくしきのちくらふうし歌のしさ
うきみなくきさあうその日のとおもしろくこころおもしれくさ吹くのまへ
あるれかくりけそうありくおそろしくたちのくくよるみちうくうねる
すてはるよろうとおもしもとつくし歌なさらくたてまつるらまへ

少将
あかのうへの花の錦乃こかりとる春のなみなみ人もきまくら
為しう
ききのうみのこやうくるみなそこよりそふへてうなく
あかしのさい
はのまふかさひあらんさ人々り春のこりほ年まうへおまん
まつりこと
ゆく春ともにへさうてるまうりなりこそあまうしるのぞ世へるとちん

吹上の神

春ゐ〜辛ひんかつ万代を君〜ぞとつるあもろ〜　ちゝまさ
ゆ〜ん彩ともこゝの春ゐ〜おれしむこころのそふるみ　くたうみ
ぞふ〜てれむ春〜ゐあるものと将ちみけむ君いつゐそ　そゐまつ

たゑまつ長者

（つぼさわ御ゆ吹上巻）

かつく紀伊国むろのおうろみるひのたゑまつと　年貴郡　紐南備　種松
つゐ長者うなりあるさきゝうのことくそゝつゐくものまつりこと　嘘　岡　政事
人たくかゝちきゝみみてんたゝくあうゝそれらめたそゝ源のつゐ
あうゝゝかるゝ大納言のむゝとあよたむゝとうあゝゝなりけるを
おゝもたゝ殺も生も失ひく世の中にすゝとたゝひそるゝ
ゝゐまつたんうくゝそのゝたゝたむゝあ一人あるゝ肉ろ
ゝ人たうまつりるうたゝ源氏ひく丞むまゐゐひけう
ゝうゝれさゝくうめゝうゝれゝたゝたゝろうとすれう
たうゝゐゝれうちういうふたう吹上の浜のゝうたひろく

れゝうたゝ丞をえゝひもゝあく今こむろうのおわ殿をたゝう
みゝゝ四ゝん八所のうちたゝこのゝゝゝのつい地とゝゝう文ろ
うちゐうゝゝたれゝゝゝれゝうちんゝゝたゝゝんゝをゝう〜ろゝふ
かゝゝゐゝゐゝつゝきゝゐ氏ゝのれゝふゝくゝゝろゝまゝこめゝう
のれゝ殿と造ゝうゝゐゝくゝゝよれゝくゝめゝうゝてゝんゝゝちむのゝたゝ
春の山ゝるゝこのちむのゝたゝ芦のちむのゝゐ秋のゝ色
北ゐゝれのゝゝれゝてゝうゝうゝうゝゝ草ゝたゝのすゝ呂
さゝたゝる花の色ゝゝの楽ゝこの世ゝ中ゝたゝをゝゝゝゝゝゝゝゝね
むゝうゝゐゝゝゝゝゝゝあゝゝゝゝゝゝゝゝ

吸上の
清さ
まろ長
者乃
館

[illegible]

[illegible]

[illegible]

贈三位宰相頼職卿の御母君

真如院殿の御坐御殿ちろ坐ふ　真如院殿御在世の時

常に御の浮刹造立の御志願深く在せしかども竟に其事を

果しなくて世をさりたまひぬ　後の第六代の大字

従二位大納言宗直卿の御ぐしに彼御志願の遂させ

たまへかしと年を嘆きわたりしに享保年中報

恩寺の末頭僧都日従上人に参じて開山し御殿乃地を

其まゝに寺院とんたうしるつかく若干の伺堂金仏よせ

たまひ荘厳日仏逐くいとも輪奐たり

白雲山報恩寺（日乗南に接る法華宗亜本寺）　本堂本尊（多宝　釈迦　首題）

脇士（上行四菩薩　文殊四天王）　脇檀（左　高祖日蓮大菩薩　衣子長三尺作像）

（九月草創の頃　右　方）　門　瑞林院殿尊牌　御霊屋　位牌堂

鎮守三十番神祠　鐘楼堂（上本寺西南にあり）　祖廟（共に本寺西南にあり）

瑞林院殿御廟（仲門の正面にあり）　御成御門（是すなわち表門なり寺町にあり）

當山の起立結構とたばかる始　國祖君南龍院殿御夫人

瑞林院殿浄秀日芳大姉　寛文六年正月廿四日をもつて東武に

掩葬まいらせ御遺骨を奉じて当城の南の上要行寺

ふしまつる納めたまへるに第二代の左字　従二位大納言光貞卿

御母君御追福のためとて深くまいらせ給ふ幕府ふ

達せらるる要行寺の地を收めて新に法華の精舎を創建し是

と白雲山報恩寺と号しく　瑞林院殿の御菩提所とへ

なりたるなりに於て宗旨を撰んで日順上人を参じて開山

導師し永世無本寺たるべき当国一宗の大廈に完ちひ

寺領若干を寄場人拙も開山権大僧都日順上人とはいと

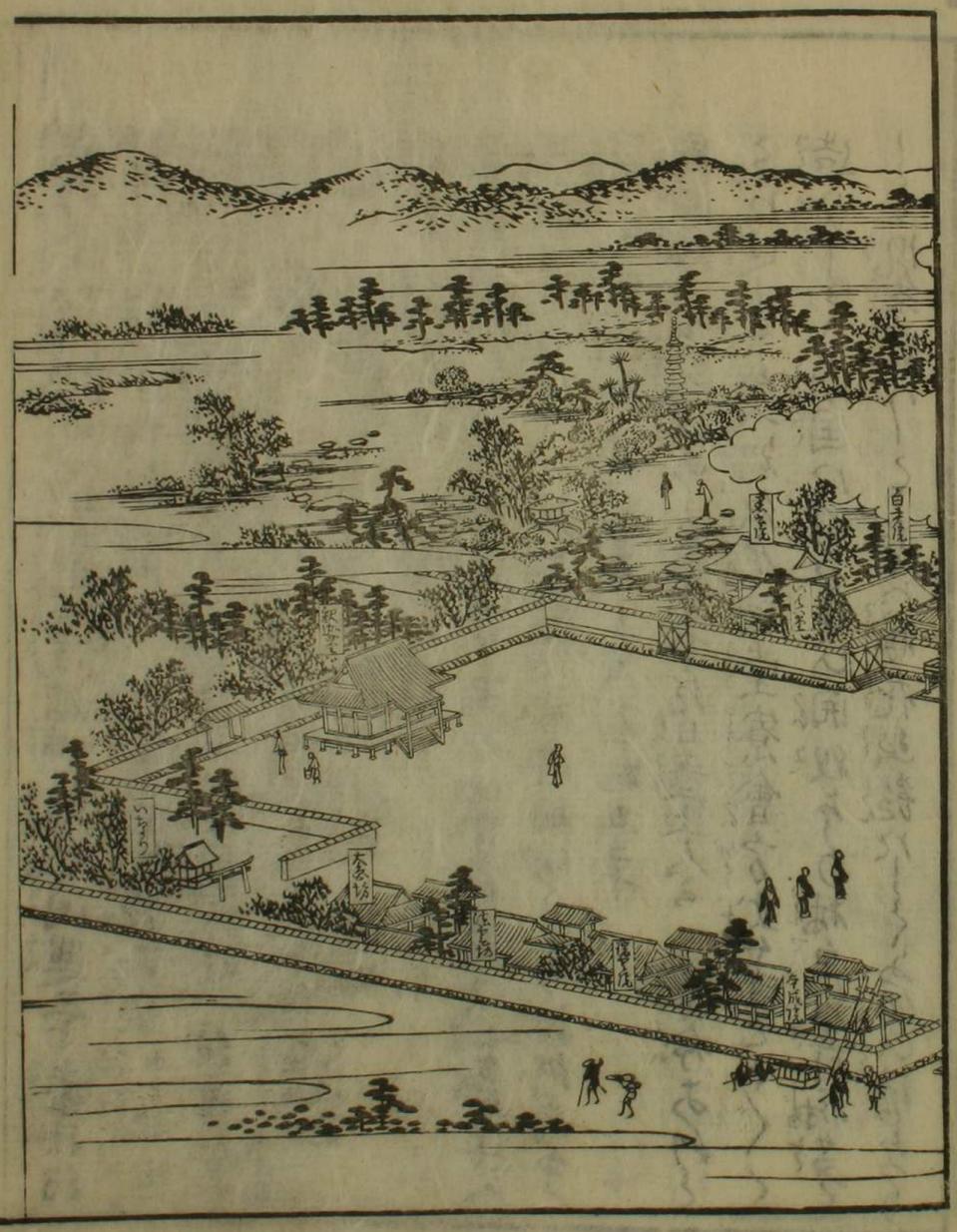
本藩の士石野昌良子なり幼にして父をうしなひ

邸中にあり牧　大学の恩寵とうしろ六歳にして出家し

甲州大野山三世日性聖人と師とたのみ給て学展ありて人
性温柔和平にして人くよく愛するひとも聰明頴悟にして
風ふ法華経誦讀し給へり外典も通達し給ひ十三歳ふして
さらに志をたのまず下総国飯高の檀林にあつまり学業すること
五年ふたたび移て上総国小西の学舎に研究をること十有余年
通計廿有余年にして学成り内外の書ふかくあまねく閲覧し給へり
たゞ尚ほ江湖の僧侶上人の右に出るものあることを恥ぢ給へり
よもつかまつり　日秀大姉　師左世のあとを資給ふ給ひしところの
力によりて遠く修行し給ふ法縁のふかきことを
たゞ今も上人に請ひて開祖ふたたびひ上人に従ひ給ふ
住持し給ふ日　叡内を免さるを権大僧都に任じ給ふ人　時に廣橋家
[illegible]　尋て延宝二年八月東武に下向し給ふ九月朔
幕府に内謁し給ふ　師の服と師人をすみやかに尚ほ

特に〳〵異世住侶交代の永式をたのみ給ふ上人貞享二年城東
安原荘相坂村の古刹に退隠し給ふ小谷中興して慈供寺
と号ず　[illegible]原の終よ元禄元年九月十日世寿六十四法臘
五十九にして寂を去めしたまへり
什寶　古仏涅槃図　吉祥山自筆　[illegible]
茶羅　大小二本　吉宗公師自筆　光貞卿師自筆提婆品
并画　宗真卿師自筆法華経　養珠院殿師消息
瑞林院殿師詩歌　開山紺紙金泥大本尊　并歴代本尊
古哲本尊　牧牛　大涅槃像　[illegible]
日蓮大士師作大黒天神　赤栴檀立像　[illegible]
佛作　弘法大師墨跡　陳子昂墨跡　外古書四〜段入ひ
宮方大学家師寄所の師手迹々〜お拝するにつゐあり
善曜山蓮心寺　上寺所南角にあり法華宗寶蔵　本堂　四組　前亞相頼宣卿師造営なり
十豆州玉澤経王山寺

運心寺
門前の姿
向けり
桜
近江
文素
本堂
長屋
玉林坊
大会所
玉屋
表門
裏門
裏門
裏門
裏門


百寺院
裏門
本堂
本会所
玉屋
長屋
裏門

祖師堂　本尊の西にあり弘法大師の像　鎮守閑運三十番神祠
すみうち法師中老日法上人の像
本堂の北にあり　釋迦堂　本尊の北にあり執事
養珠夫人市姫の位牌　鐘楼堂　位牌堂
釈迦三尊　文殊菩薩　普賢菩薩　六十六部
阿弥陀如来　黒書院　本尊の北にあり
板本尊の厨子　昭光上人の絵
養珠夫人の位牌
花の檀上の
狐塚　神職を崇敬
子院七區　法華坊　王子坊　大乗坊　大光坊
雑蓄
當山は長州山沢妙法寺第十四世良應院日産上人
芝七十四丙辰年　養珠院殿市姫より駿河府中へ
一宇を造建あるせらるる　元和五年
國祖君　沖入国あるせたまふ日産上人を　芳命あり
こたへ申しあげ人別仏殿諸堂寮會方丈等ことごとく
造営〳〵当国に移すとての用意なり林泉に青樹多く
〳〵風景殊りく春は桜花咲乱れ清水

美しい庭中の池の面に水鳥遊び秋を楽林の月白く
〳〵あさぎりたち霧晴れゆくの日の晩をあらて
四季ともふかけりたくたりく風景斜なりけるく
慶徳山妙法寺　日蓮大士の像　中老日法上人の彫刻
あり法華宗　祖師堂　宗門日蓮大士の像
当寺は名所那和佐の荘にあり〳〵元和三年日栄
上人〳〵に移〳〵中興の開山なり
法性山本光寺　日蓮　宗紀姫弘書に屬す　鎮守三十番神祠　本尊の末社あり
大室山惠雲寺　日蓮　下総のくに永昌寺に屬す　本尊十一面観
世尊　法華大師の像
照信山地雲院三光寺　桃取あり寺に屬す　本尊の孫弘
観音堂　本尊の他　三十三所の観音
けい一尺八寸　西国　雑宝於大明神
古寺にて後堂大徳の手歴手
えい和年中こたの後
新つ山窓善寺　本尊の釈迦佛

大名寺
本堂
法華堂
大日堂
大師堂

寺町や
門さきたちの
雲の花
祐昌
大をさし
地めん
新げつ
雲林立
麥林
報恩寺
浅草寺
本願寺
三ヶ寺
厚寺
妙法寺
妙法寺
妙法寺

鎮守社

稲荷社 [illegible]

[illegible]山[illegible]寺中[illegible]外[illegible]寮大[illegible]
猫の寺怪の[illegible]縁起[illegible]

増上山仏陀院護念寺

日所 [illegible]山流[illegible]

本尊阿弥陀佛

長一尺二寸す 脇士 勢至 善[illegible]

以上こゝろ[illegible]

[illegible]

[illegible]

蜀江錦五條袈裟の長　東照神君仲在世の打〻堪君に勧め打ものしたまふ堪君

[illegible]

遷都ありしをうけ中興念誓禁戒[illegible]

深信山大恩寺　[illegible]

尚古寺記[illegible]

[illegible]

國祖君南龍公の顧命[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

上人の法徳[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

かとさぶめ給のそ[illegible]
のよりろるぶ[illegible]の[illegible]倍[illegible]
偏[illegible]
[illegible]上人他に生れ[illegible]
あ[illegible]
[illegible]上人と遊[illegible]
[illegible]
[illegible]

紀集に大智寺（法西仏京作多聞院の屬）卒る阿弥陀佛（光仁天皇の日の作）
御霊舎（卒塔婆のまえ歴代のそう牌を安しまつる）一切経藏（卒塔婆のうしろ）にあり
鐘楼（卒塔婆のまえ）
當山の宝水年間（前亞相頼宜郎）の御發願に
よつて開山を巻き上人の門弟ちう上人法諱は魯門玄恕
と号し俗姓は源氏甲州の末流にして（下の小付紙の奈よりうと小異）播士山中氏の家伝と参ぜこれに
遠州横須賀の人なり父山中左衛門義継と母氏嘗て夢むく
寺光あつく懐中と思つたく当てするうち胎てあつて
免するにわかに最健なる男子なるとび父母ともよろこび

[illegible]

德光上人の命とうけ〳〵拂塵寺に住し〳〵て法幢を竪起し〳〵て三百有餘の江潮の大衆を領せしに偉れ論講の梵規をあふぎ四方に名法遠天下に普し〳〵て亞相公上人に帰依し給へる〳〵あさからぬ縁を南北に誘く大慈寺を再建し〳〵て中興の祖と〳〵め尊ぶと刹立して開基とし其宗徒〳〵たるもの〳〵の法腝や傾くに杳んでも称の如く法とい〳〵隱遁の本りい最ゆゑ〳〵遠く志を決して泉州堺大徒寺に退隱に志るに道德の熟するところ[illegible]

[illegible]

誓〳〵家尚山に入り〳〵給ふの地とせんと若狹所のこゝろを牛とあ〳〵ぶ境域の内蛙鳴ときくこゝろ〳〵めたまへとあ〳〵に當日ようして庭中なる蓮池に群る蛙〳〵を修〳〵日に大經を課まるこゝ怠惰こゝろ〳〵世尊寿如來陽字の[illegible]を[illegible]物の未爾未然を察し〳〵緣め六根を[illegible]人を曉示してこまゞ使へをなさしめるこゝろ[illegible]ちゝ人ふゝく神〳〵かゝるゆゝよ其利益[illegible]の祥〳〵

自翁の[illegible]

[illegible]

[illegible]

人もなく[illegible]ろはの[illegible]

[illegible]

[illegible]

明王院
山王社

越後北之初勝

越後 節

瘤枝こ花ゆくたりこ小公堂〜〜千のこの庭ゑ後そのえげーをと三ん流生
のこころ〜〜地元ひゑ〜〜こたこ〜〜ん〜〜
三ゑ　谷風の吹上にゐる多梅のこゑ天陸堂ちる雪やわらん　定家

梅花百詠　溪毒　秦サ游

一帯寒流契湛神臨流芳樹見天眞搞衣映月沙
追鶴玉質漁波鏡裏人自得皐蘭全奥味肯隨岸
柳共烟塵雪晴香動津頭路曾約漁郎往探春

自然斉発句　梅　雪にてのトろ春ちるとや　宗祇
吹上やいろ〜そ梅ちる毒の花　若山里白

吹上城代のゑ〜〜〜〜〜〜〜〜

保〜〜〜〜千ゑのくに人のり毛　溪々

明院　（谷村西に府城の寄後神　生ゑ神に〜〜〜〜倒ゑ〜〜〜〜〜〜〜〜

白道山万性寺幡隨意院

寛永九年九月この地よりうつす

本尊阿弥陀仏

本尊の西にあり

尺六寸 弘誓堂

本尊の南にあり 幡隨意上人墓

相模国厚澤郡名村寺村氏なり文和上野国鉄林ふ

居しく影ち川嶋七黨の魁れしく小宗家の嗣高なりのちにお

州吾妻寺村に移住たまふ夫婦つゝ愁て然て柱に

にのうまふある夜の夢に然て山に法く下向の路より廣野を

色々なりつゝ人々の大慈法より追来りたまち化〳〵宮殊

〳〵あり時まへ〳〵に夢い覚たりむ〳〵其のち懐胎の身

よりあまり月満く天文十一壬寅年十月十五日出誕たこのとき

群鳥箱根に〳〵つゝく屋のうへに産門を於ときそ

丑寅の時ときの門とゝそい弘法大師にて

あゝを追い九歳にして

父母に[illegible]出家[illegible]
既に二十一歳の春[illegible]日[illegible]玉滝の二[illegible]
人[illegible]
子手に白い幡を[illegible]
左[illegible]
[illegible]夜[illegible]
[illegible]
[illegible]
玉[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
の白幡に[illegible]
号[illegible]

[illegible]上人の室に[illegible]
[illegible]法戦場に声[illegible]
[illegible]
に無[illegible]
の外地[illegible]
諸国遍[illegible]
の徳[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

浄土宗と号す建あつく仲田に新智恩寺惣隨院と号すまた
日十三申年武蔵谷村蓮生法師の遺跡に彼の其堂宇の荒
廢日ゝと造建し日十七亥年芳州に田のゐたりに隠居しく
つゝゐを創し入門寺とゝまりて九州へ往廻しゐる付よも見
赤間ヶ関にく新仏と化ゑし迎国の其へゐる僧ゐる
と称ス其後道元ゐつゝ造建村井原橋をこれなる半に創
建しゝ閑居しなまゝ病にわゝるゝ辞爲来て
得ゐの上にく咲ゝゐゐ上人此彩くの向ひ十念と唱
なまんだぶくく亡ゐる別所に彩彩彩彩の為遺ゐる彩
ハ往院の往ゐるゐべ延生入滅の始終ゐさゐゐあつまゐも
まゝ不思議ゐゐゐゐの諸弟を表滅しゝ上品蓮華の
彩果再会をちゐゐゐゐゐゐ安安の再しゐと祈ゐんゐのゐさ
彩く彩彩ゐる彩ゐゐ彩ゐゐとのゐひゐゐ保治彩彩して

西に向ひし業をゐめ辞世の偈を書しく曰
白道運歩数十年以火消火難思術
書畢く筆を擲て合掌しゝ念仏しゝ眠ごく遷神し
なまんだぶしゝそど時ふ天れ元年乙卯二月五日歩義七十彩
四ゐゐ志ゐふ延ゐ寺をゐに引移ス

堀留の眺望　細すゐまゐ四方に墨ゐ城下にいゐ入ゐゐゐ東のゐさに
れゐゐ義しく四方に墨ゐ城下にいゐ入ゐゐゐ東のゐさに
ゐたゐ生ゐゐゐゐゐゐ

堀留吼え

油摺岩

廿松千餘載久
佇らん古人はて
枝葉あらも
蟠龍のごし

老松や
紙よりの神も
すれくるや

近江
智月

角虎山丈六寺　曹洞宗　本尊丈六の阿弥陀佛

芭蕉翁碑銘曰

翁云　俤無古人と世古人を此人嘗作祈古池

蛙哉翁昂是古人

旭岡庵春山翁碑石

塊亭風怡誌

井泉神社　井泉町　生土神　祭礼九月十六日

土人わきて人を安羊間若捷のこれ井泉五郎左衛門なるものある後の神霊なり

井泉明神　祭礼　告のごくのりつ

祀神伊勢両太神宮

凡たまはとろくろむめのち那　春山

宮須神社　村にあり　旧名雄の宮　黒石つばの生土神　例年九月十二日

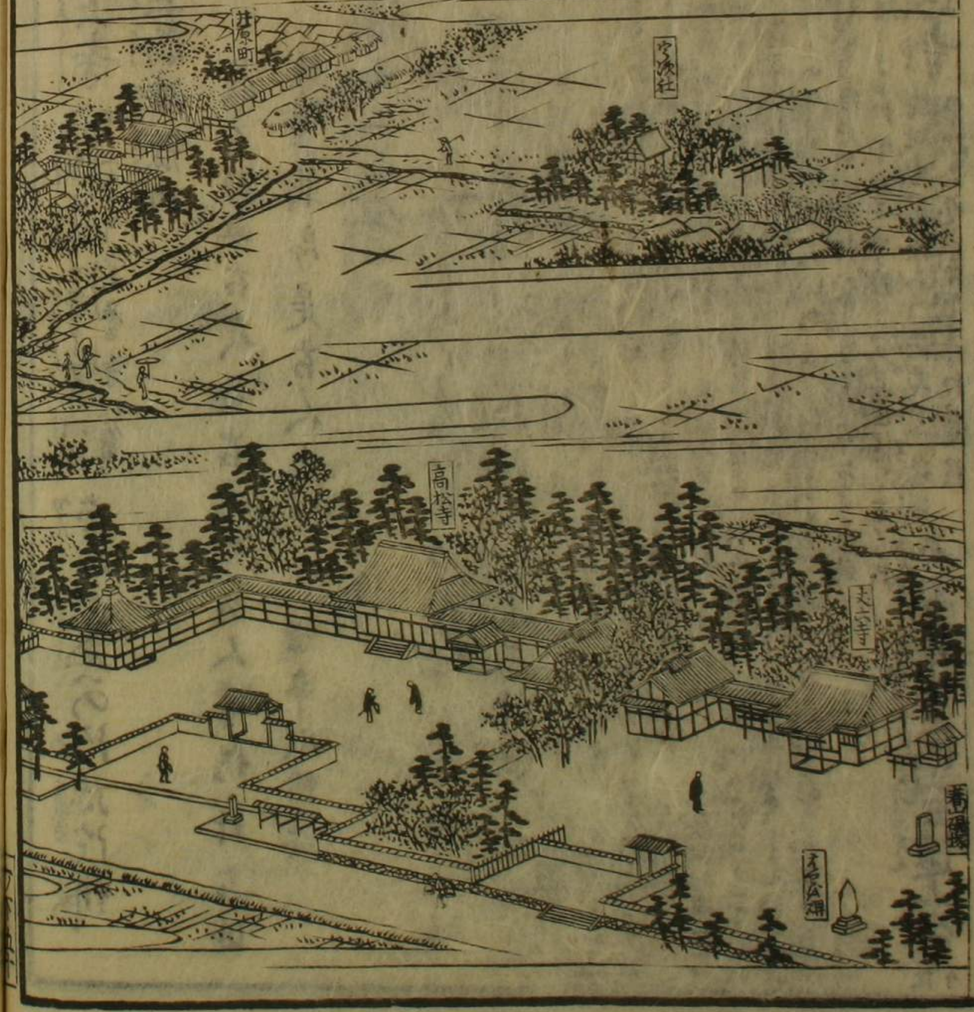
社伝なし　生土神に対し　焼　漢　しら羊　黒　荒廃

大樹　しの俗　赤土の　石　祀神

養珠山浄心寺　日村南一町　法華一乗　本堂本尊開山日遠上人の作

甲州大月の末寺　末寺

井戸明神社
宇須伸社
丈六寺
高松寺
天正寺



三十番神祠　法内忠桂山の西の丈六岩

當寺へ　國君祈願のために造建あらせたまふ精舍也嘗て

元和九年　國祖南龍院殿御違例こんに甚しく危篤ふ

わたらせたまひしに此付　御母君　養珠院殿東武に在て

此よし聞しめされしかたふ驚き歎たまひ直ち玉駕を命

して御帰國あらせたまふ其後の御心労たかへ乃ち

御使を馳て甲州大窪遠寺日遠上人を護持の僧と該

已たまふこれ如く其後弟忠桂逝ふ應じて玉駕ふ陪

奉て

當府へ帰ふ丹誠を擬して祈念したまふ未然な

らんことを

御違例たふ復して所任屈したまふ

此遠縁にて遠寺の住職を起立て長く国家の安全を

いのりたまふ御事たること一日　養珠院殿御撫金

のうち所くに玉駕と回向したまふこの寺院村の地より

らたまふに兩山相環て蒼蓊たる深く長江流れて

煩囂なく其中幽冥にして草樹茂たる乃ち

くうきのさまにて此地の幽勝実に吾情を遣ふと遂

に

国君の請に忠桂をして巷幽谷を開き梵

宇を営む日遠上人谷詩に寺産を多い南藩行福の道場と

の料として若干の寺産を多い南藩行福の道場と

ちまふ上人示寂して一隅の卓尊を寫して尚ふ附る

永く開堂傳燈の信に今本堂に安置す

真光寺山　村の西に町あり相伝へ山下に茅ヶ崎城国

東淨寺山　村の西に町あり淨土宗

宿壽寺山光明寺　村の西に町あり法華宗

幸る千手観世音　村の西に町あり法華宗

漢門の額　光明寺

占取メ紀南山ノ水　鶴守弁財天稲荷神祠　黄葉猶慳の筆

宏開ス齊北門庭　通宵路聯也

眼底有疑休縱歩　胸中無碍自通宵

白雲関　門外已無差別路　雲邊又有一重関

無虚応の鞋　八十三翁圓通

逍風千古播　支那国悦山の鞋也

齋堂　禅悦堂　心敬

壽萬年長

天王殿　四天王堂の額なり　福地鍾霊特感聖護国

慈門現瑞大歓三會度人

方丈　開山真像　中尊聖徳太子　東方持国　西方廣目　南方増長　北方多門

庫裡　廊下

浴室

臭清浄未詳便休

水垢鉏除更須一洗

位牌堂

地蔵尊

清規有禅謾参龍象筵

徳行無戯堪應人天供

同堂中

法眼圓明日費汁金非分外

偷心不死時常滴水也難消

地獄何時空願海無盡日　金龍書之

青蓮居　高泉

衆生本即佛機轉有知朔

祖師堂　賓壽山　黄檗猶湛

梵刹建成呼賓王壽無量　舊本尊阿弥陀今置千手観音毘首竭磨作昔日在御室諸安富寺

祖燈剛起紀現瑞光永明　黄檗四代猶湛

鐘楼　舊吹上社之大鐘銘仍序見多り圓通猶下卷

観音堂　本堂の西の五間あり

仰塔場

南山開基圓通徳師元禄七年の造建なり徳隣諱いまの茶道

岡無野の人びとく其姓氏と詳にすべき黄檗と第四世なり那

獨湛わるるの上吳れ〳〵遠くて濤聲夢裏に枕ふ兎角
たゞ書くべき山〳〵の絶景ろに讀こ尋く私化慈光務ふ
海門〳〵もて深恨を又〳〵坐こゝ孝こに一且大高氏
あるもの〳〵家に〳〵忽ちん暮〳〵原底る汨徹して去
恬の時つゝ〳〵乃この大誓願に歩こ圖外に生ずるこゝ
五年つゝ諸國を編歷るもの十年〳〵切磨修と閲すること
十年これわつく居る南嶽淳林寺にうゝくわるこの願
滿んゝに〳〵

前亞相賴宣卿其芳德を聞〳〵めこし是
と城中に致こん〳〵迎臣紙〳〵て迎へ〳〵めたまふる所別一句
の偈を口〳〵こゝと謝に其偈を曰

僧窓深鎖謝寰緣不測界名到貴遊清代已今
湖海絳莫野水白鷗眠。

かく〳〵師遂に三大誓願の願と滿當寺と艸創あるるのち

元祿十五年秋閏八月
亞相光貞卿芳命に依りて〳〵城中に住〳〵陞坐問答とそ勅の
たまへ〳〵〳〵園邑語錄に〳〵

秋日過光明寺贈普白私尚　祇南海

三十年前曾識君不圖今復挹清芳機鋒翻水千江月。
瓶鉢歸山一塢雲。霜葉時兼巢鳥下。烟鐘晚帶本魚
聞。自差宦海頭都白。何日青山謝世氣